

さいご  
最後にひとつだけ  
ねが  
お願いしても  
よろしいでしょうか②

おおとり  
鳳ナナ・作  
ほおのきソラ・絵



アルファポリスきずな文庫

# もくじ

第一章	断じてデートではありません。	006
第二章	拳で躰をして差し上げましょう。	032
第三章	ボンボコボンボコなレオお兄様。	049
第四章	卑怯ですわこの腹黒王子。	065
第五章	ようやく会えましたね拳の想い人。	084
第六章	撲殺劇の始まりですわ。	111

第七章	覚悟はよろしくて？ 我が愛しのお肉様。	136
第八章	あの世で詫びてきなさい。	178
第九章	楽しいお茶会を始めましょう。	194
第十章	ブッ飛ばしてもよろしいですか？	208
	あとがき	230



## ゴドウィン

パリスタン王国の宰相。悪徳貴族たちをまとめている。スカーレットの命を狙っている。



## ナナカ

獣人族の男の子。スカーレットに近づくため、ヴァンディミオン公爵家でメイドをしている。



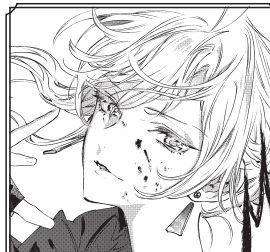
## シゲルド

騎士団長の息子。ジュリアスの命でカイルたちについて調べていた。真面目な好青年。



## ジュリアス

パリスタン王国の第一王子で、カイルの兄。成績優秀、容姿端麗、将来有望な王位継承者。スカーレットをからかって遊ぶのが好き。



## スカーレット

ヴァンディミオン公爵家のお嬢様。第二王子カイルの婚約者だったが、婚約破棄される。"氷の薔薇"、"狂犬姫"などの二つ名を持つ武闘派令嬢。

登場人物紹介

登場人物紹介

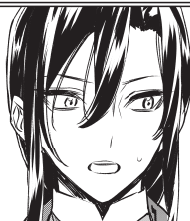
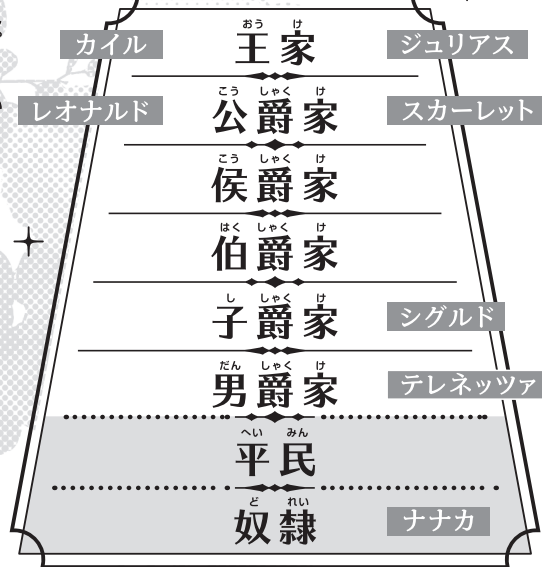
登場人物紹介

登場人物紹介

登場人物紹介

登場人物紹介

## 爵位



## レオナルド

ヴァンディミオン公爵家のご令息で、スカーレットのお兄ちゃん。破天荒な妹と腹黒上司のせいで胃薬が手放せない。



## テレネツァ

男爵令嬢で、カイルの恋人。スカーレットと婚約破棄するようカイルをそそのかした。



## カイル

パリスタン王国の第二王子。スカーレットに婚約破棄を言い渡し、鉄拳制裁された。どうしようもないおバカさん。

## 第一章 断じてデートではありません。

ジュリアス様が仲介屋さんから奴隷商の情報を聞き出した翌朝。

私とナナカは、王都グランヒルデにある貴族街を訪れておりました。

高級な邸宅が立ち並ぶこの場所に住んでいるのは、高位の爵位を持つ上位貴族の方々です。

彼らは王宮に勤めている要人であり、自分たちが管理する領地ではなく、別邸があるこの街区で暮らしています。

まさか、思いもしませんよね。

よりにもよって、奴隷の所有を禁止しているこの国の中心地で、堂々と奴隷商をしている方がいらつしやるなんて。

この情報を聞いた時には驚き、また感心したものです。

貴族の邸宅であれば、多少怪しまれても、そう簡単に捜査できませんからね。

特に上位貴族の邸宅であればなおさらです。

私とナナカは、その中のある邸宅を訪ねました。

ちなみに功労者であるジュリアス様は、捜査のためとはいえ、王子が奴隷を買いに行くのは問題があるということで、宿で留守番。いい気味ですね。

「ようこそいらつしやいました。美しいお嬢さん。なんでも、珍しい奴隷をお求めだとか」

客間に通されると、いかにも高級な椅子に腰かけた貴族が、こちらを値踏みするような口調でおつしやいました。

ザザラン伯爵。

この街区に住む上位貴族の中でも、特に羽振りのいい殿方です。

一見穏やかな老紳士に見えますが、その正体は奴隷商の畜生でございます。

人は見かけによらないものですね。

「しかしいいけませんな。いくらご両親に内緒で奴隷が欲しいからといって、貴族のお嬢様がジャンクのようなチンピラに関わっては。あなたの品位を落としますぞ」

「他にツテがなかったもので、仲介屋のジャンクさんに頼むしかなかったのですよ。ザーラン様は、あのお方とはどんな関係ですの？」

「なに、大した仲ではありませんよ。スラムには時折、希少価値がある奴隷候補が逃げ込んで来るのでね。そういった場合には、他の奴隷商ではなく私のところへ連れてくるように、契約を結んでいただけです。ああ見えてあれは顔が広い。私以外にも、この街区に住んでいる貴族や奴隷商と繋がりを持っているようですから。まったく小狡い輩です」

ナナカがジャンクさんのことを知っていたのも、ゴドウィン様が王都のスラムにいる仲介屋として名前を出しているのを聞いたことがあったからだそうです。そしてジャンクさんが紹介してくださったこの奴隷商なら、必ずオークシヨンに参加しているはず。

遠回りにはなってしまうしましたが、ここでの交渉がうまく行けば、なんとか奴隷オークシヨンへ潜り込めそうですね。

「希少価値のある奴隷を捕まえていると聞きましたが、例えばどのような？」

よくぞ聞いてくれましたとばかりに、ザーラン様が両手を広げて語り出します。

「そうですね、例えばエルフ、ドワーフ、有翼人、魔族……ああ、そうそう。そこにいる獣人族なんかも、とても希少価値がある商品ですよ」

隣に座っている執事姿のナナカが、ビクツと身体を震わせます。

平静を装ってはいるものの、どこか不安げな顔をしていますね。

大丈夫ですよ、ナナカ。私たちの立てた作戦はきつとうまくいきます。

「なぜ彼が獣人族だとわかったのですか？」

「黒髪で琥珀色の瞳は獣人族の特徴ですから。それに、わざわざ私のもとまで奴隷を求めてやってくるようなお方だ。希少な奴隷の一人でも連れていくべきでしょう。そうでなければ、私としても商談をする価値がない。いやはや、言葉で語るよりもよほどいい名刺になつてくれましたな、彼は」

ははは、と笑い声を上げるザーラン様に微笑で返します。

なに笑ってるんですか？ ブツ飛ばしますよ？

「……ダメだぞ」

はいはい、わかっていますよナナカ。

どんなに目の前に腹が立つ相手がいいたとしても、本命であるゴドウィン様を殴るその時までは極力、我慢しますから。たぶん。

「それで、どんな奴隷をご所望で？ 獣人族を所有されているお嬢さんのお眼鏡にかなうような商品が用意できると思いますか？」

さて、本番はここからですね。

私はテーブルに置かれていた紅茶を一口だけ口に含んでから、わざとらしく髪先をいじくり回して言いました。

「私、奴隷を買うつもりでここに来たわけではありませんの」

「ほう？ ではなんのご用で？」

「もうすぐ王都のどこかで奴隷オークションが行われるとの噂をお聞きしました。私もそのオークションに行ってみたいのですが、紹介してはいただけませんか？」

「ああ、オークションですか。なるほど。ふむ……」

ザザーラン様が腕を組み、黙り込みます。

やはり目の色が変わりましたか。オークションは個人で奴隷を売るのは比べものにならないほど、大きな案件でしょうからね。そう簡単に承諾できないのでしょうか。

予想通りの展開です。

あとはこの欲深そうなお方が、私たちの用意した餌に食いついてくれるかどうかですね。「……オークションに招待されるためには、奴隷を何度も売買したという実績が必要です。さらに身分を明らかにして、審査を受ける必要があります。これには最低でも半年間かかるため、いまから準備をしても到底間に合わないでしょう」

「そこをどうにかありませんか？ お金ならいくらでもお支払いいたします」切実な口調で訴えかけます。

するとザザーラン様は、首を横に振ってから口を開きました。

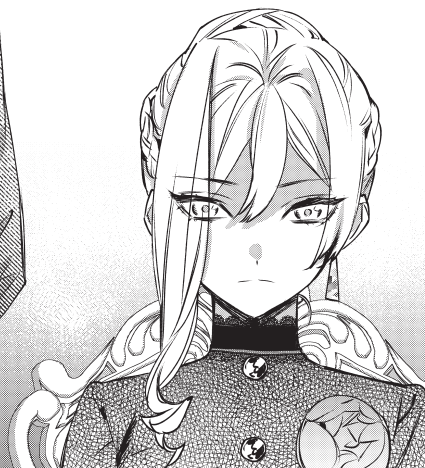
「いえ、お代は結構。その代わりと言ってはなんです——」

ザザーラン様がニヤリと笑みを浮かべます。

それは、隠されていた醜悪な本性が剥き出しになったかのような、おぞましい笑顔でした。

その代わりと言っては  
なんですが

そこにいる獣人族の奴隷を  
私にお譲りいただけるので  
あれば――



「もし、そこにいる獣人族の奴隷を私にお譲りいただけるのであれば、私の親戚の娘とでも偽って、なんとかしてあなたをオークションへお連れしましょう。こちらも相応のリスクがある話ですが、お互いにとって悪くない条件かと。どうでしょうか」

ナナカと視線を合わせてうなずきます。

うまく餌に食いつきましたね。作戦成功です。

あとはこちらも用意していた言葉で返すだけですわね。

「まあ、たったそれだけで紹介していただけますの？　ならばよろしくお願いいたしますわ」

パチン、と手を叩いて喜びを露わにする私に、ザザラン様も満足そうにうなずかれました。

「では、商談成立ということ。オークションは三日後の夜になりますが、その獣人の奴隷紋の譲渡はいつ頃行いましょうか」

三日後ですか。ナナカの情報通りですね。

「この者は奴隷ではありますが、わが家の都合から刻印はしておりません。よって奴隷紋

の譲渡は不要ですわ」

「なんと！ 奴隷紋を刻まずに奴隷を飼っておられるのですか!? ずいぶんとその奴隷の驕に自信がおりなのですね。いやはや勇敢なことです。では、いまその奴隷をいただいても？」

「いえ、それは明日にしたいだけでもよろしいでしょうか。これは当家でも長らく重宝してきた奴隷ですので、別れを惜しまたく……」

「おお、そうでしたか。お気持ちお察いたしますとも。わかりました。それでは、また明日に。いやはや、オークションを前にいい商品入荷できて、こちらとしても助かりましたよ。はっはっは」

終始穏やかに商談を終えた私たちは、伯爵邸をあとにしました。

お住まいのご本人も含めて、成金趣味のなんとも胸糞悪いお宅でしたね。できれば二度とお邪魔したくないものです。

「……驚いた」

貴族街を抜け、露店で賑わう王都の商業区に着いた辺りで、ナナカがポツリとつぶや

きました。

「なにがですの？」

「……ちゃんと話し合いで解決することもできるんだなって。絶対に途中で我慢せずに、あの貴族を殴ると思っていた」

その場でナナカの頭を拳でグリグリしてあげました。

驕のなっていない執事をお仕置きするのは、主である私の役目ですからね。

「……痛い。冗談だったのに」

「自業自得ですわ」

なにはともあれ、オークションへ招待していただくこともできて、一安心ですわね。

元々、希少な獣人族のナナカを奴隷として譲る代わりに、信用を得るという作戦でしたが、まさかあちら側から条件としてそれを提示してくれるとは思ってもみませんでした。

「でも、本当によかったのですか？ 新たに刻まれた奴隷紋をあとで消すことはできませんが、明日あなたを引き渡して以降、こちらでは身の安全を保障できませんわよ？ すぐに助けられるように動くつもりではいますけれど……」

乱れた髪を直してあげながら言う、ナナカがコクリとうなずきます。

「……大丈夫だ。アイツの口ぶりでは、僕もオークションに出品されるだろう。それまでは、手荒に扱われることもないと思う。すべてが解決したあとに、回収してくれば問題ない」

この作戦は元はといえば、ナナカ自身が提案したものでした。

私の命を狙った罪滅ぼしだと言っておりましたが、奴隷紋で命令に逆らえない状態だったのですから、もう気にしておりませんのに。

「……そんなことより、僕は眠い」

不意にナナカがフラフラとよろめぎ出します。

そういえばこの子……というより獣人族は夜行性でしたね。

わが家でメイドをしていた頃は、意識を覚醒させる魔法の薬を使って無理矢理起きていたみたいです。けれどここ数日は薬を切らしてしまつたらしく、時折犬歯を剥き出しにして大きなあくびをしていたのを思い出しました。

「宿で寝ますか？」

ふらついて露店に倒れ込みそうになる身体を支えてあげながら言う、ナナカはもう半分以上寝かかった表情でつぶやきます。

「……そうさせてもらう。夜になったら……起こ……して」

消え入りそうな声とともに、ナナカの身体がみるみるうちに黒狼に戻ってしまいました。突然人間が狼になったことで、周囲を歩いていた冒険者や、商人の方々が目を見開いて驚いております。

珍しいですものね、獣人族は。

「ごめん遊ばせ。どうぞお気になさらずに」

ほほえみながら周囲に会釈をして、ナナカを抱き上げます。

「まったく。主の手を煩わせるなんて、執事失格ですね」

宿に戻ると、ジュリアス様が暇そうに本を読んでいらつしやいました。

彼はナナカを抱きかかえた私を見るなり「ペットでも飼うつもりか」と茶化してきましたが、当然のように無視です。無視。

私はジュリアス様のほうを見もせず、ナナカをそつとベッドに寝かせたのでした。

——王都グランヒルデの商業区。

数々の商店が立ち並ぶ大通りを、私は変装用にと買っておいた赤いエプロンドレス姿で歩いておりました。

熟睡しているナナカを宿に残し、散策にやってきました。

お昼を過ぎたばかりの通りは賑やかで人も多く、とても活気づいています。私の気持ちとはまるで正反対に……

「先ほどの露店で食した肉料理は、地味な見た目ながらもなかなか美味であつたな。あの店の主人を王宮の料理人として雇えないか検討してみようと思うのだが、どう思う？」  
平民ふうの地味な青色のチュニックで変装したジュリアス様が、私の隣を歩きながらしれつとした顔でのたまいました。

「あの、地味な服装をした金髪の殿方」

「なんだ、地味な服装をした銀髪の貴婦人」

互いに表面上はニツコリとほほえみながら、向き合います。

「なぜ私についてきていらつしやるのでしょうか？」

「宿で留守番をするのも飽きたからな。ちょうど外に出ようと思つていたら、偶然タイミングが重なつた。それだけのことだ」

いけしやあしやあと。

宿を出てからずっと、私の横を歩いているではないですか。

「そうでしたか。では私はあちらにまいますので、ご機嫌よう」

背を向けて、ジュリアス様とは反対の方向に歩いていきます。

せつかく一人で悠々と商業区を歩いて回ろうと思つていましたのに、あのお方と一緒にいては、心が休まる暇ありませんからね。

さて、邪魔者はいなくなつたことですし、商業区を満喫するとしましようか。

「その銀髪の嬢ちゃん！ ウチのアップルパイは絶品だぜえ！ お嬢ちゃんカワイイから、もし買ってくれたら、おまけにこっちのリングもひとつつけちゃうよ！」

通りの両端に並ぶ露店から、おじさんが声をかけてきます。

それに答えたのは、なぜか私ではなく別の声でした。

「ならば二つ買うので、おまけも二つ分つけてもらおうか。そっちのマフィンももらおう」

「寄つてらっしゃい見てらっしゃい！ その麗しい銀髪のお嬢さん！ いまならこのミスリル製のネックレスがたったの銀貨十枚だよ！ もし買ってくれるなら、おまけにこのミスリル製のチョーカーもつけてあげよう！ きつと美しいお嬢さんにピッタリだよ！」

「こんな不純物が混じった粗悪なミスリル製品があつてたまるか。言いふらさないでいてやるから、代わりに銀貨二枚にまけろ。もちろんこのチョーカーもつけてな」

「ちよつとそこの銀髪のお方。あなたの背後に禍々しい女の怨霊が見えます。ここで出会つたのもなにかのご縁、いまなら特別にアンデッドに効果のあるこの聖なるパワーストーンを金貨一枚で——」

「残念だが、この娘は怨霊程度なら素手で撃退できる力を持っているからな。余計なお世話だろう。だが、このパワーストーンはいいものだ。よし、私が買い取ろう」

あの……そろそろツツコンでもよろしいでしょうか。

「その金髪のお方」

「なんだ、その銀髪の娘」

ジュリアス様と再びニコツと満面の笑みを浮かべて向き合います。

「先ほどおつしやつていましたよね、偶然外出するタイミングが一緒になっただけだよ」

「なんだ、そんなデマカセを本当に信じていたのか？ 嘘に決まっているだろう。あなた

にもかわいらしいところがあるのだな」

震える拳を、もう片方の手で押さえつけます。

ダメですよ、私。

ここで拳を振るつてはいけません。

よりもよつて王宮が目と鼻の先にあるこの王都で、次期国王のお顔をブン殴るだなんて。

ああ、でも欲望に負けて、もう殴つてスカッとしてしまいたい。

お兄様、私どうしたらいいのでしょうか。

「ふふっ……！」

口元を手で押さえて、ジュリアス様が笑いをこらえます。

先ほど  
おっしゃっていましたがね  
偶然外出するタイミングが  
一緒になったただだと

そんなデマカセを  
本当に  
信じていたのか？

あなたにも  
かわいらしいところがあるのだな

よし、やつぱり殴りましょう。

「やはりあなたは面白いな。まさかこの私が、愚か者を嘲笑うこと以外で、こんなにも愉快な気持ちになれるとは思っていなかった」

「それはよかったですね。さようなら」

顔をそむけて、早足でその場を立ち去ろうとすると、ジュリアス様に手を掴まれました。  
「すまなかった。少しからかいすぎたな」

いまさら謝られても、もう遅いです。

そう思いながらも、一応反省している顔を見ようと半目で振り返ると……

「むぐっ」

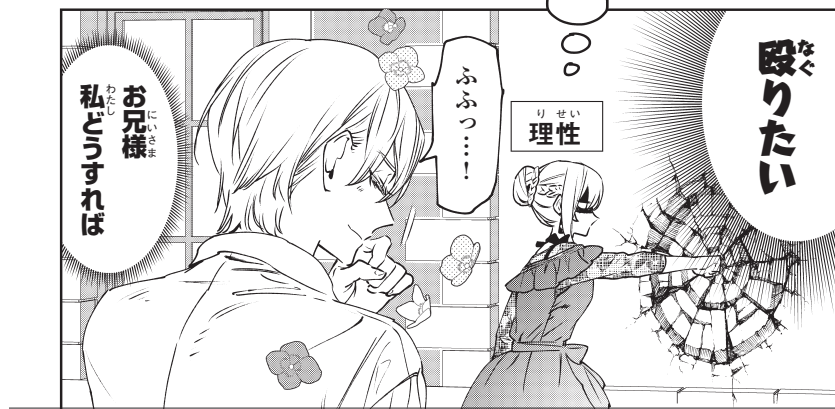
口にサクツとしたパンのようなものを突っ込まれました。

リングとはちみつの甘さがお口いっぱいに広がります。

これはアップルパイでしょうか。とても美味でございますね。

「引っかけたな」

悪戯っ子のような無邪気な笑みを浮かべるジュリアス様。



殴りたい

理性

ふふっ……！

お兄様  
私どうすれば

抗議の声を上げようとして、急いで口の中のパイを食べきると、再び口にパイを差し込まれます。

「ほら、私の分もあげよう。味わって食べるのだぞ」  
おいしいのは認めましょう。

ですが、食べ物につられて、私がいままでの蛮行を許すと思つたら大間違いですわ。

「同じ店で買ったリンゴのマフィンもあるぞ」

「仕方ないですね。許して差し上げます」

おいしい甘味には逆らえませんでした。

腹黒だけあって、人心を操る術には長けていらつしやいますね。

やはり油断ありません、ジュリアス・フォン・パリスタン。

「さすがに歩き疲れたな。少し休むか」

「珍しく意見が合いましたね。そういたしましょう」

商業区の商店を一通り回った私たちは、王都の中央に設置された噴水の前にやつて来ました。

そこには、私たちと同じように憩いを求めてやってきた人々が、ところどころに置かれた木の椅子に座ってお話していらつしやいます。

「こちらへどうぞ、レディ」

「あら、気が利きますわね。ありがとうございます」

ジュリアス様は椅子の上に大きなハンカチを広げ、気取ったポーズでそこを示して言いました。私はそれを見てくすりとはほえみながら、腰を下ろします。

腹が立つほど様になっているそのお姿に、平民ふうのチュニクがあまりにも似合わないんですもの。つい笑ってしまいました。

「ずいぶんとこの街に慣れていらつしやいますのね」

「時折学院を抜け出して視察に来ていたからな。商業区に関しては勝手知ったるところだ」

しれつとおつしやっていますが、それは視察ではなくサボリと言うのでは？

そう言つてやろうかと思つたものの、私を淑女として扱ったその姿勢に免じて、今回だけは見逃して差し上げましょう。

「どうだった。わが国自慢の商業区は」

隣に腰かけたジュリアス様が、横目で私をうかがいながらおっしゃいました。

「そうですわね。以前カイル様にお昼ご飯を買いに行かされていた時は、見て回る余裕がなかったのですが、こうして改めて見るととても活気があつて面白い場所でしたわ。楽しかったです」

ジュリアス様があまりにも純粋な、自分の宝物を自慢する子供のような目をしていましたので、私は嫌味を言うのも忘れて、思わず普通に答えてしまいました。

まったく、甘いですね私も。

「特にジュリアス様がすすめてくださった甘いお菓子は、悔しいですがとてもおいしゅうございました」

「そうか。口に合つたようでよかった。あれは是非、あなたに食べていただきたいと、ここに来るたびに思っていた。それと、楽しかったと言つたな。ならば無理矢理ついていた甲斐もあつたというものだ」

天使のようなほほえみを浮かべながら言うジュリアス様。

私をからかうためについてきたのかと思つておりましたが、実は商業区を案内して回りたかつたのでしょうか。

それならそうと、最初からはつきりおっしゃつていただければ邪険になどしませんのに。天の邪鬼なお方ですね、本当に。

「私は退屈なことが嫌いだ」

遠くから聞こえてくる商業区の喧騒に目を細めながら、ジュリアス様が突然そんなことをつぶやきました。

退屈なことが嫌いじゃない人なんて、なかなかいないのでは？

そう思いつつ、とりあえず私は黙つてジュリアス様のお言葉に耳を傾けます。

「私にとって、世の中に存在する大抵のものはつまらない。それは退屈を嫌う私には、まるで拷問のようだと思ふ。だから、せめてこの両目に映る狭い世界ぐらいは、面白いもので溢れていてほしいと願っている」

白く細長いジュリアス様の指先が、そつと私の手を取ります。

「幼い頃の私にとって面白かつたのは、とてもいびつでみにくいものだけだった。だが、



世の中<sup>よなか</sup>に存在<sup>そんぞう</sup>する  
大抵<sup>たいてい</sup>のものはつまらない

せめてこの両目<sup>りょうめ</sup>に映<sup>うつ</sup>る  
狭い世界<sup>せまいせかい</sup>ぐらいは面白いもので  
溢<sup>あふ</sup>れていてほしいと願<sup>ねが</sup>っている

そして今<sup>いま</sup>一番面白<sup>いちばんおもしろ</sup>いものは  
スカレット  
あなたなんだ

いまは違<sup>ちが</sup>うと断言<sup>だんげん</sup>できる。それはあなたと出會<sup>であ</sup>ったからだ」

「ジュリアス様<sup>さま</sup>……？」

戸惑<sup>とまど</sup>う私<sup>わたし</sup>に、ジュリアス様<sup>さま</sup>は不意<sup>ふい</sup>に顔<sup>かお</sup>を寄<sup>よ</sup>せてきて、私<sup>わたし</sup>にしか聞<sup>き</sup>こえないような小<sup>ちひ</sup>さな  
お声<sup>こゑ</sup>でささやかれました。

「私は面白<sup>おもしろ</sup>いことが好き<sup>す</sup>いだ。そして私<sup>わたし</sup>にとって、いま一番面白<sup>いちばんおもしろ</sup>いものはスカレット、あ  
なたなんだ」

そして、その言葉<sup>ことば</sup>が終<sup>お</sup>わるや否<sup>いな</sup>や、返答<sup>へんとう</sup>する間<sup>ま</sup>もなく、私<sup>わたし</sup>の額<sup>ひたい</sup>にご自分<sup>じぶん</sup>の唇<sup>くちびる</sup>を静<sup>しず</sup>かに  
重ね<sup>かさ</sup>ねたのです。

「……！」

あまりに突然<sup>とつぜん</sup>のことだったので、私<sup>わたし</sup>は思<sup>おも</sup>わず目<sup>め</sup>を見開<sup>みひら</sup>いて硬直<sup>こうちよく</sup>してしまいます。

ジュリアス様<sup>さま</sup>はゆっくりと唇<sup>くちびる</sup>を離<sup>はな</sup>し、そんな私<sup>わたし</sup>を面白<sup>おもしろ</sup>そうに見<sup>み</sup>つめました。

「……私<sup>わたし</sup>のこの想<sup>おも</sup>いが、一般<sup>いっぱん</sup>的な恋愛感情<sup>れんあいかんじょう</sup>と異なるものだと自覚<sup>じかく</sup>している。だが、これ  
だけは言<sup>い</sup>わせてくれ」

いまだに困惑<sup>こんわく</sup>から抜け出<sup>ぬ</sup>せない私<sup>わたし</sup>に向かって、ジュリアス様<sup>さま</sup>は優<sup>やさ</sup>しくほほえみながら

おつしやいました。

「——スカーレット、私はあなたが愛おしい。この世界の、どんなものよりも」  
いつもとは違う、裏表のない表情を、私はただ呆然と見つめることしかできませんでした。

気がつくとも、私はいつの間にか宿に戻っておりしました。

「……私、どうやってここまで帰ってきたのかしら」

窓から差し込んでいた陽射しは、すでに夕焼けに染まっております。  
隣の部屋で寝ているナナカもそろそろ起き出してくる頃でしょうか。

そんなことをぼんやりと考えながら、私は初めて人の唇が触れた額に触れます。

「……そうやってあなたは、また私をからかって遊んでいらつしやるのでしょうか？」

この国を揺るがす調査をしている最中に、あのような告白まがいのことを言い出すなんて。

どれだけ私の心を掻き乱せば気がすむのですか、ジュリアス様は。

あなたが一体なにを考えていらつしやるのか、私にはさっぱり理解できません。  
だって、いままで一度だってそんな素振り、見せたことなかったではないですか。  
ジュリアス様は私をからかっていらつしやるだけ。

そう結論づけて、私は無理矢理思考を停止させたのでした。

## 第二章 拳で蝶をして差し上げましょう。

翌日の朝。

宿にジュリアス様の姿はありませんでした。

お部屋には「少し出てくる。昼までには戻るから、奴隷商との交渉は任せた」との書き置きがしてありました。

昨日の今日で、彼にどんな態度で接すればいいかわからなかった私は、顔を合わせずにすんだことに胸をなで下ろします。

さあ気を取り直して、ザザラン様のお宅へとまいりましょう。

私とナナカは、再び貴族街へとやってきました。

今日のナナカは執事服ではなく、簡素な半袖のシャツと、七分丈のパンツをはいております。

奴隷になったら捨てられてしまうから、執事服は返しておきたいと言われたのです。別に構いませんのに。

まあ、ナナカが帰って来た時に、再び見繕うのは面倒ですからね。

私が保管しておいたほうがいいでしょう。

「お約束通り、わが家の奴隷を差し上げましょう。その代わりお願いした件、お忘れなく」

「承りました……と言いたいところですが」

ソファに深く腰かけたザザラン様が、もったいぶるようにニヤリと笑みを浮かべます。

なんででしょう。

この期に及んで、なにか条件でも付け足すつもりでしょうか。

あまり調子に乗られると、私もそろそろ手が滑りかねませんよ。

ジュリアス様の一件と、この成金趣味のお家のせいで、ただでさえ気分が悪いといひますのに。

「取引をする前に、その少年が本当に獣人族であることを確認させてほしいのです。この場

で獣化<sup>じゅうか</sup>してもらってもよろしいでしょうか？

いまさらなにを言い出すのかと思えば、そんなことでしたか。用心深い<sup>ようじんふかい</sup>ことで。

「疑<sup>うたが</sup>っていらつしやるのですか？ 私があなたを騙<sup>だま</sup>そうとしていると」

「いえいえ、滅相<sup>めつそう</sup>ありません。ですが、念<sup>ねん</sup>には念<sup>ねん</sup>を……ですよ。琥珀<sup>こはく</sup>の瞳<sup>ひとみ</sup>に黒髪<sup>くろかみ</sup>は確かに獣人族<sup>じゅうじんぞく</sup>の特徴<sup>とくしゆう</sup>ではありますが、稀<sup>まれ</sup>にいるのですよ。奴隷<sup>どれい</sup>をそのように変装<sup>へんそう</sup>させて、高く売りさばこうとする悪人<sup>あくにん</sup>がね」

「はあ。わかりました」

奴隷<sup>どれい</sup>の売買<sup>ばいばい</sup>をしている時点で、あなたこそ悪人<sup>あくにん</sup>確定<sup>かくてい</sup>なのですが。

自分<sup>じぶん</sup>たちの行い<sup>おこな</sup>を柵<sup>たな</sup>に上げようなど、片腹痛<sup>かたはらいた</sup>いですね。

「ナナカ、獣化<sup>じゅうか</sup>してあげなさい」

「……わかった」

ナナカの姿<sup>すがた</sup>が人型<sup>ひとがた</sup>から黒狼<sup>こくろう</sup>へと変わります。

それを見たザザラン様<sup>さま</sup>は「おお！ 素晴<sup>すば</sup>らしい！」と歓声<sup>かんせい</sup>を上げて拍手<sup>はくしゅ</sup>しました。褒められたにもかかわらず、ナナカはそっぽを向<sup>む</sup>いてピクリとも動きません。

……わかった

これほどの  
ツヤと毛並み

瞳<sup>ひとみ</sup>の大きさ  
と  
美しさ

オークションの  
目玉商品<sup>めだまじゆひん</sup>は  
こいつに決まりだ！

素晴<sup>すば</sup>らしい……

当然ですわね。

このような人買いのクズに褒められたところで、嫌悪感こそあれ、嬉しいはずもありませんから。

「素晴らしい……これほどのツヤと毛並み。それに瞳の大きさと美しさ。オークションの目玉商品はこいつに決まりだ」

「お気に召したようで幸いですわ」

「オークションにご招待するだけで、これをいただくのは申し訳ないほどです。よければ後ほど、わが家で飼っている奴隷を紹介しましょう。格安でお譲りしますよ」

「結構です。欲しい奴隷はオークションで見繕いますので」

「ああ、そうでしたな。元々あなたは、オークションに出る希少な奴隷を見つけるために、ツテを探して回っていたのでしたな。しかしこの獣人族に勝る商品となりますと、探すのもなかなか骨が折れるのではありませんか？ 一体どのようなものをお探しで——」

その時、ガチャリとドアが開き、筋骨隆々で毛深い殿方が客間に入ってきました。

そのお方は、部屋に入ってくるなり私をジロジロと無遠慮に見てきます。

ザザラン様のお客人でしようか。

あまりに下品で教養のなさそうなお顔をしていらつしやるので、山賊の襲撃かと思いましたが。

「ご主人、今日仕入れる奴隷つてのは、この女か？」

「ははは。違うよ、ドノヴァン。その女性は奴隷を売りに来たお客様だ」

「なんだ、ちげえのか。女なら売る前にたっぷり楽しめたのによ」

「おい、いい加減無礼だぞ。まったく。すみませんね、わが家の奴隷は驕がなっていていませんで。お恥ずかしい限りです」

「……別に、気にしておりませんので」

この人間離れた体格と獣臭。

人間と魔獣のハーフであるライカンスロープでしようか。

おそらくは護衛用の奴隷といったところでしようね。

「お、じゃあ奴隷はこっちの狼のほうか。この毛色と目の色、獣人族か？」

「ああ。オークションの目玉になつてもらう、ナナカ君だ。くれぐれも丁重に扱ってくれ

たまえよ」

「なにぬりいこと言つてんだ。獣人族といやあ、再生力が高くて有名なんだぜ？　ちよつとばかし手荒に躑けても問題ねえよ。オラ、来い！」

ドノヴァンさんがナナカに首輪をつけて、リードを強く引っ張りました。

首が絞まって苦しいのか、ナナカは「グルル……！」と低く唸りながら、しきりに頭を振っています。

「この！　言うこと聞きやがれ！　クソ犬が！」

ドノヴァンさんが懐から棘つきの鞭を取り出します。

そして抵抗するナナカに向かつて、容赦なく鞭を振りかぶりしました。

それを見た私は、とつさにソファから立ち上がって手を伸ばし――

「――どうやらここには、まったく躑がなっていないペットがいるようですね」

振るわれた鞭の先端を、手で掴み取りました。

「あ……？」

まさか自慢の得物を手掴みされるとは思っていなかったのか、ドノヴァンさんは口をあ

んぐり開けたまま、目を見開いています。

知能の低そうなお顔をあまり私に向けないでくださいますか？

顔面パンチを叩き込みたくります。

「おつむの弱いバカなペットには、この私が直々にお仕置きをしてあげましょう」

にこやかにそう告げると、ドノヴァンさんはハッと我に返って不愉快そうな声でおつしやいました。

「おいおい、この犬はもうご主人のものだろ？　困るんだよなア、人の家の躑に口を出さ

れちゃ。それとテメエ……」

ドノヴァンさんが鋭く突った犬歯を剥き出しにして凄みます。

「誰がおつむの弱いバカなペットだ？　あと、お仕置きするとかなんとか、舐めたこと言ってくれたなア？　ぐちゃぐちゃに引き裂かれてえか、このアマア……！」

「まあ恐ろしい」

本当に恐ろしいわ。あまりにも怖くて怖くて……

この方を、必要以上に痛めつけてしまいそうです。

二度と私に反抗しようと思えなくなるくらい、徹底的に。

「お嬢さん、あまりうちのドノヴァンを挑発しないほうがいい。察するに、あなたにも多少の武術の心得はあるのでしょうか——」

やれやれと肩をすくめながら、ザザラン様が自慢なお顔でおっしゃいました。

「その男、奴隷に落ちる前はA級冒険者だったのです。報酬の分配で揉めてパーティーメンバーを殺したのがきっかけで奴隷になりましたが、その実力は折り紙つき。わが国の騎士団長クラスでもなければ手に負えない、化け物なのですよ」

自信満々に説明していただいているところ、申し訳ないのですが……A級冒険者というものが一体どの程度の腕前なのかわからない私にとっては、そのお話、まるでピンと来ません。

「それがどうかなさいましたか？」

「ですから、余計な口出しは危ないとご忠告を——」

「もう遅えよ、ご主人。俺が客だとか女だとか気にして、なにもしないでも思ったか？ 頭に來たぜ、このクソアマ」

あたまた  
頭に來たぜ  
このクソアマ!!



ザザーラン様のお言葉を遮りながら、ドノヴァンさんが思い切り鞭を引いて私を引き寄せようとしています。

どうやらご自分の腕力に相当自信があまりのようですね。

察するに、いままで自分の思い通りにならない者はすべて、ご自慢の力でねじ伏せてきたのでしょうか。

ですが世の中、上には上がいるものです。

それをいまこの場で、私が思い知らせてあげましょう。

「あ……？」

どれだけ鞭を力強く引こうとも、まったく動かない私の様子を見て、ドノヴァンさんが眉をひそめます。

なにかの間違いだと思っただのか、力加減を確認するかのようになど何度も鞭を引くドノヴァンさん。けれど私は、涼しい顔で一步たりともその場から動きませんでした。

「ど、どうなつてやがる!？」

ついには両手で鞭を掴み、思い切り引っ張り出します。

私と綱引きでもしたいのでしょうか。

まったく、やんちゃなペットですね。

「まさか、この程度で全力ですか？」

「う、うるせえ! なんだ、なんだこれは!? なんでこんな細腕の女一匹動かせねえ!? うおおおお!!」

背を反らしながら体重をうしろにかけて、全力で鞭を引っ張るドノヴァンさん。

あまりにも必死すぎて、いつそほえましくくらいです。

「こ、これは一体……? おい、ドノヴァン。ふざけているのか? そうなのだろう!？」

「ちげえよご主人! こいつ、俺が全力で引っ張ってるのに、ピクリとも動きやがらねえ! なんつーバカ力してやがるんだ……!」

まあ、失礼な。

貴族の令嬢を捕まえてバカ力、だなんて。

口の減らないペットには、やはりお仕置が必要ですね。

「さて、ザザーラン様」

「は、はい……っ!？」

「このお方、ドノヴァンさんはオークションに出品される商品なのでしうか？」

「い、いえ……その男は私個人の護衛兼、他の奴隷の調教係で——」

「そうなのですね、よかつた。——では遠慮なくブツ飛ばせませう」

「……は？」

鞭を握る手に力を込めて、思い切り引つ張りませう。

「失せなさい——この愚か者が」

「ぎ——っ!？」

一瞬にしてドノヴァンさんが引つ張られ、背後の窓ガラスを突き破つてはるか彼方に飛んでいきました。

少し遅れて、遠くのほうで破碎音と悲鳴が聞こえます。

どこか別の貴族の家にも突き刺さつたのでしう。

まあ、あの速度と飛距離から考えるに、いくら生命力が強いライカンスロープとはいへ、しばらくは再起不能でしうね。自業自得ですが。

「かわいそうに……痛かつたでしう？」

私はナナカのそばに屈み込み、首輪を外して首元をなでませう。

首輪が食い込んだ部分にはミズ腫れのような痕がつき、血がにじんでいました。

「——優しき風よ、彼の者の傷を癒やしたまえ」

治癒の魔法をかけると、すぐにナナカの傷が治ります。

……よかつた。

あまりに深い傷だと魔法を使つても痕が残る心配があつたのですが、ちゃんときれいに治せたみたいですわね。

「ちゃんと迎えに行きますから。少しの間だけ我慢していてくださいわね」

「わう」

ささやきかけると、肯定するかのようになナカが小さく吠えます。

そして、私の手から血が滴つてゐることに気づき、心配そうに頭をすりつけてきました。

「ふふ。大丈夫ですよ、あとで治しますから。心配してくれてありがとう」

ぽんぽん、ともふもふした頭を優しくなでてやりながら立ち上がります。

ソファのほうを振り返ると、ザザラン様が口を開けたまま固まっております。  
「そういえば先ほど、奴隷を格安で譲っていただけるとおっしゃっていましたね」  
「は、はひつ?」

「お一人壊してしまいましたし、色々と弁償する費用も必要でしょう。ナナカをお譲りしたお礼は、これでチャラということでしょうか? それと――」

私はゆつくりとザザラン様に歩み寄ります。

顔面蒼白で震えている彼に、私は微笑を浮かべながら言いました。

「あなたにとって、奴隷は大切な商品なのでしょう? 商品価値を下げたくなければ、手

荒に扱わないほうがよろしいかと存じます」

「ぎ、肝に銘じておきますう!」

引きつったお顔で、ザザラン様がブンブンと首を縦に振りました。

ここまで釘を刺しておけば、もう二度とナナカに手荒な真似はしないでしよう。

あとは二日後を待つだけです。

それから、約束通りオークション会場の場所を教えてもらい、私はザザラン様にもう

一度ほえみかけました。

「では、オークション当日の夜にお会いいたしましょう。ご機嫌よう」

ザザラン様の邸宅を出て商業区に戻ってきた私は、ずっと泊まっていた宿の前に見慣れた馬車が停まっていることに気がつきました。

はい、わが家の家紋つきの馬車ですね。

ということは、中に乗っていらつしやるのはもちろん――

「――ようやく見つけたぞ、スカーレット」

馬車から降りてきたレオお兄様が、いつも以上に厳しくお顔をしかめて立ちはだかりました。

「ご機嫌よう、レオお兄様。本日はどのようなご用件でしょうか」

「誤魔化しは通じんぞ。とりあえず馬車の中で話を聞こうか」

がつしりと肩を掴まれ、私は助けを求めて辺りを見回します。すると馬車の窓越しに、ジュリアス様の観念したお顔が見えました。